

【書評・紹介】

谷本 一之 著
『北方民族 歌の旅』
(札幌, 北海道新聞社, 2006年12月, 284頁, 2400円+税)

甲 地 利 恵

北方諸民族の音楽研究の第一人者であり、当学会においては元会長であり現顧問を務められる谷本一之氏の最新著である。

前著『アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌』（谷本2000）は、1960年代を民族誌的現在に据えてアイヌ音楽の変容の過程を明らかにした学術書であり、そこではたびたび北方先住民族の音楽の事例がアイヌ音楽との比較において言及されていた。

今回はそれら北方先住民族の音楽文化の調査を中心とした内容であるが、いわゆる専門書ではなく、新聞や雑誌、演奏会プログラムなどに不定期に掲載された一般向けの記事や読み物を集めたものとなっている。本書序文の表現を借りれば「もっぱら北極圏をうろうろしてほぼ三十年」の間に「この

旅で見聞きしたこと、考えたことなどを、折に触れて現地調査の報告という形で新聞や雑誌などに寄稿してきた」中から「三十数編を選び、アラスカ、カナダなどの北方諸地域を、ほぼ旅した年代順に章建てした」ほか、「北方からは外れるが、長期の現地調査をしてきたハンガリーについて一章」が加えられている（本書：11-13）。

各章冒頭には「これまでの歩みを通観したコメント」が新たに書き下ろされている。あわせて120点以上の写真がカラー、白黒とりまぜて掲載されている。巻末には、氏の長きに渡る研究調査を中心とした年譜が付録されている。

構成は次のとおりである（〔 〕内は初出年で、評者が書き添えた）。

北風の歌の旅〔書き下ろし〕

第1章 アラスカの歌

エスキモーの音楽と生活〔1986〕／アラスカ先住民言語地図〔1987〕／エスキモーのオリンピック〔1977〕／歌にみる北の先住民交易〔2003〕／星野道夫君の遥かなまなざし〔2003〕

第2章 カナダ、グリーンランドの歌

大自然の鼓動—季節と生活のリズム〔1989〕／イヌイットのスクエアダンス〔1997〕／エスキモーの捕鯨村〔1987〕／オーロラの響き〔1986〕／氷河の島の人々の歌〔書き下ろし〕

第3章 シベリアの歌

レクツカラの原型—シベリアの喉あそび〔1990〕／社会主義政権下のチュクチの歌〔1991〕／シベリアの国際太平洋大学〔1992〕／サハ・シャーマンの儀礼とシベリアの声

表紙画像

[2001] /ハンティ族の「熊祭り」 [1999] /ロシアの蠟管—先住民族の音の文化の軌跡 [2003]

第4章 カムチャツカの歌

コリャク・シャーマンの巫術を見た！ [1995] /廃村に生き残る歌と踊り [1996] /コリャクの「ホロロ祭り」 [2002]

第5章 ウラルの歌

ウラルの魂—ユーラシアの歌の旅 [1999] /ロシア・バシコルトスタンを訪ねて [2004] /歌のシルクロードに期待するもの [1990] /「追分の道」を考えること—OIWAKE シンポジウムを終えて [1990]

第6章 民族をつなぐ歌

伝統取りもどす北方諸民族—第一回芸能祭によせて [1992] /民族文化継承へ熱く連帯—第二回芸能祭によせて [1994] /「ジェサップ領域」の変容と未来 [2002] /里帰りしたバラートシのアイヌ民俗資料 [1997]

第7章 ハンガリーの歌

ジプシーの喜びの歌、悲しみの歌 [1982] /探訪記—ロムの村へ [1976] /ハンガリーの音楽文化 [1963] /民族音楽学者としてのコダーイ [1982] /力と情熱、解放をもたらしたジプシー音楽 [1990] /来道したバルトーク二世 [1988] /バルトークと民族音楽 [1981]

年譜

第1～4章は、北方圏の民族・文化に関心ある人にとって格好の手引きになるとともに、専門的立場からこの地域に関わってきた碩学の方々にとっても興味深いであろう現地調査の報告集となっている。とくに3章と4章は旧ソ連時代からロシア共和国へと移行するペレストロイカ期に開始されるシベリアでの調査行がテーマであり、サハヤコリャクのシャーマニズム、ハンティやコリャクの熊の魂送りなど、貴重な儀礼の内容とその伝承の最新状況を知ることができる、本書の白眉である。同時に、約1世紀のあいだにシベリアの諸先住民族の蒙った変化と混乱が、生活の維持や文化の伝承、とりわけ歌をうたい踊りをおどるという行為の上にかかに現れているかが伝えられる。

極東の地で「伝統に即しながら新しい創造をめざす「歌と踊りのアンサンブル」の活動も活発」（同：131）という状況は、「ロシア化に抗して、民族の伝統的生活や文化を守ろうという気運」（同：104）の高まりであり、「いかにしてロシアナイズを克服し、民族のアイデンティティーの確立に役立つものにしようかと、いろいろ工夫を凝らしはじめているところなのである」（同：147）という一方で、人々の生活は決して楽観できない状況にある。

公式には廃村となり政府からの補助金が打ち切られたカムチャツカのパレン村で、氏はジェサップ北太平洋調査（1897～1902）による約1世紀前の録音に残されたコリャクの古い歌を村の人々に聴いてもらっている。そこでは、「録音した歌い手の名前を言い当てることができ、またその歌が現在もうたい続けられているというような、確かな記憶のなかで伝統文化が伝承されていた」（同：140）。だがそれは、経済的に追い込まれた結果やむを得ずスノーモービルではなく犬橇を使うという選択肢のない伝統的生活との同時進行でもある。人々の「伝統文化についての現状認識は厳しく、未来についても悲観的」（同：140）であり、「すべてについて自給自足の生活を強いられている人々を伝統的文化に追い込んだ閉塞的状况を示しているよう

に思えてならない」(同：141)との件りはまことに痛ましい。「伝統文化が退嬰に結びつくものでなく、本来の意味で民族のアイデンティティーを培い、発展の力になり得る自立した生活基盤をいつ築くことができるのか」(同：141)という問いは、序文に記された「いまその人々は、民族の権利と文化の復権のために努力を尽くしている。その努力に重ねて私に何ができるのか」(同：12)という本書編纂の端緒にも連なっている。

本書はこうした氏のフィールド報告であると共に、氏のこれまでの研究の歩みを読者であるわれわれに伝えてくれる格好の研究自伝になっている。ハンガリーの作曲家ベラ・バルトーク(1881 - 1945)の作品研究に始まる民族音楽への関心、ハンガリーでのロム(ジプシー)音楽の調査の経験、大学時代に「私淑した」というアイヌ語研究の泰斗たる知里真志保(1909 - 1961)との出会いとアイヌ音楽の記録調査、これらはその後、エスキモーから始まる北方圏での氏の調査の旅に直接間接に繋がっていることが分かる。

第1章、第2章を中心に語られる氏のエスキモー音楽の調査は1979年のセントローレンス島を皮切りに始まっている。エスキモー社会での民族学・文化人類学的調査に従事してきた日本人は決して少なくないだろうが、民族音楽学者による音楽の調査はおそらく1967年と1968年の小泉文夫(1927 - 1983)以来であり、その後も日本人によるエスキモー音楽の調査・研究は、事実上ほとんど谷本氏一人が担ってきた。続くアラスカ、カナダ、グリーンランド、シベリアと、音楽研究者でこれだけ広範な地域・民族の音楽調査を継続し、現在もなおフィールドワーカーとして厳冬の北の地へ赴く静かな情熱の淵源は、「人に会うのが仕事と言えなくもないが、この人々がなんと魅力的なことか。酔っ払いにからまれて閉口することも多いが、人々の気持ちの柔らかさ、温かさにはすっかり参ってしまう」(同：12)からなのであろう。

「真冬に、録音・録画の機材を詰め込んだ重い荷物とともにツンドラの空港にただ一人置き去りにされたりすると、不安は頂点に達し、絶望的にさえなってくる。こんな思いをしながらも、帰りの飛行機のなかで何となく次の調査地について思いを巡らしていたり、帰国したその日から次の旅の荷造りを始めたりしているのは、私にとってそこが大変居心地の良いところだからなのだろうと思っている」(同：11)と綴る氏は、しかし甘っちょろいセンチメンタリズムとは無縁の人でもある。氏がセントローレンス島で体験したエピソードを次のように語る件りが、評者には最も厳しいものに響いた。

「セントローレンス島は海鳥の宝庫で、望遠鏡を首からぶらさげたたくさんのバードウォッチャーが本土からやってくる(中略)ある日いつものように海岸を散歩していると、向こうの方から酔っぱらいが歩み寄ってきて、じっと私の顔を見ながら「お前もバードウォッチャーか？」と聞いてくる。「違うよ」と答えると、しばらく目を宙に据えながらおもむろに「あ、そうか、お前はエスキモーウォッチャーだな」と宣ってよろよろと歩み去っていった。この言葉は、それからの私の現地調査の旅に「通奏低音」として重々しく響き続けている」(同：18-19)

ハンガリーでのロム(ジプシー)音楽の長期にわたるフィールドワークについては、「ロム(ジプシー)の歌や踊りは、その後の私の民族音楽の調査・研究の方向を決定づけた」(同：215)「差別の「原点」に生きてきた歴史を如実に示す彼らの存在が、私の北辺での経験に重なっていると考えている」(同：13)と述べる。音楽の研究対象としては一見「アイヌ」「北方」とは別々のようでありながら、氏には一貫した視点と姿勢に基づく連関するテーマであり続けてきたことが、次のような記述からも分かるであろう。

「彼ら流浪の民は何世紀にもわたって追い立てられ、一夜として安らぐ時を過ごせないという差別に苦しむ過酷な歴史を生きてきた。そのあまりにも深い悲しみの溜め息が涙とともに音になる歌や、それでも生きようとする魂の叫びの狂熱の踊りは、それが人間にとってどんな意義があるのかを深く考えさせずにはおこななかった。私の大学の恩師・知里真志保博士はアイヌの歌について、「そこでは歌は楽しみのためではなく、生きるための真剣な努力なのである」と書いている。私はこのアイヌやロムに学んだ「生きるための真剣な努力の歌」を求めて、シベリア大陸、北米大陸の少数民族を訪れる旅を続けてきたように思っている」（同：215-216）

民族音楽学もしくは音楽人類学の最大の命題—人間はなぜ音楽をするのか—は、それぞれの文化の中での「生きるための真剣な努力の歌」の多彩なありようを探ることにある。ロムの「踊り歌」「泣き歌」、極北の諸民族の歌の儀礼、またはウラルの人々が旧ソビエト下で密かに歌い継いできた歌、これらは単なる娯楽ではなく、冒頭で紹介される次の歌詞に象徴されているように、生業と同等の重みをもつ人間の営みであることが、読者に伝わってくるであろう。

「歌を歌うのは楽しい／狩りをするのは楽しい／言葉を束ねて歌をつくるのはむずかしい／氷が張ってしまったら魚を獲るのはむずかしい」（アラスカ・エスキモーの太鼓歌）（同：9、69）

氏はまた、これまでにいくつかの重要な国際シンポジウムの企画を発案し実現させてきた、いわば学問のコーディネーターとしての手腕もつとに知られているところである。第5章では「OIWAKE シンポジウム」（1990年、江差町）の、第6章では「第一回北方諸民族芸能交流とシンポジウム」（1992年、札幌市）、「同第二回」（1994年、ロシア共和国マガダン市）、「渡鴉のアーチ ジェサップ北太平洋調査を追試・検証する」（2002年、札幌市）の概要と成果を知ることができる。

氏の関心や洞察はウラルからハンガリーにいたる「歌のシルクロード」、とりわけメリスマと自由リズムを特徴とする歌の民族的な連鎖へも及んでいる。「OIWAKE シンポジウム」は、それまで単に「似ている」という情緒的な印象でしか語られなかった、本邦の追分節とモンゴルのオルティンドー（長歌）を初めとするウラル諸民族の民謡との連関を学問的に検証しようとしたおそらく初めての国際シンポジウムであった。氏はその後バシコルトスタンで長歌を初めとする調査も行っており、その概要が第5章で報告されている。「1920年代にロシアの研究者が長歌を録音した二百本近い蠟管」の「録音の歌と現代の歌の比較」を目下バシコルトスタンの研究者との共同課題にしているという（同：159）。もしや“第二回” OIWAKE シンポジウムの開催と併せてその成果が披露されるのでは？と期待を掻きたてられる。

それぞれの現地調査での体験は、簡潔に淡々と綴られる。それだけに、人々の「生きるための真剣な努力の歌」のありように反映された痛ましい歴史も迫ってくる。鋭く峻厳な「ウォッチャー」の眼差しを向けつつ、出会う人々への尽きない興味と愛情とが行間に見え隠れするような文章の温かみが、何より本書を魅力的なものにしている。

参考文献

谷本一之

2000 『アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌』 北海道大学図書刊行会

（こうち・りえ／北海道立アイヌ民族文化研究センター）